

〈一般投稿論文〉[研究論文]

共同発話構築に見られる日本語母語話者の「言語ホスト性」* ——接触場面及び母語場面における三者間課題達成談話の分析から——

ツオイ エカテリーナ

一橋大学

This paper describes the language management of Japanese native speakers as linguistic hosts in task-oriented triad conversations. The author analyzed the data focusing on the location, the structure, and the function of co-constructed utterances in the discourse. The study's results showed that native speakers used utterance co-construction to establish cooperative relations and express empathy with each other. On the other hand, as linguistic hosts, they managed the conversation flow and supported non-native speakers in utterance production to complete mutual tasks.

キーワード： 課題達成談話、共同発話、接触場面、言語管理、言語ホスト性

1. はじめに

近年、日本における外国人労働者と外国人留学生の増加に伴い、日常生活において日本語母語話者が日本語非母語話者と共同で何らかの活動に取り組む機会が多くなっている。そうした異文化コミュニケーションが行われる接触場面においては媒介言語の熟練者である母語話者の役割が大きい。母語話者の言語管理を扱った研究で指摘されているように、「言語ホスト」(linguistic host) (Fan 1994) としての母語話者は会話維持の責任を担い、非母語話者の理解促進やコミュニケーションの効率化を図る。

本稿では、Fan (1994) が提示した「言語ホスト」という概念を借用し、接触場面における日本語母語話者の言語行動の特徴を「言語ホスト性」と呼ぶ。その特徴を明らかにするために、条件統制した会話データを用い、接触場面と母語場面における母語話者の言語行動の相違を検討した上で、接触場面における母語話者間の言語行動と非母語話者に向け

* 本稿の執筆に際し、データ収集にご協力くださった方々、貴重なご指摘とご助言をくださった査読委員、編集委員の方々に心より感謝申し上げます。なお、不備や誤りは、すべて筆者の責任によります。

た言語行動の比較を行う。

これまでの、接触場面を扱った多くの研究では主に母語話者・非母語話者間の会話を取り上げられ、母語話者と非母語話者の言語使用の相違が注目されてきた。また、母語話者の言語管理に関しては、直接非母語話者に向けた言語行動としての「フォリナー・トーク」が関心を集めてきた。Ferguson (1975) が述べているように、「フォリナー・トーク」とは、非母語話者の理解促進のために非母語話者の言語能力に合わせて難易度の高い語彙の言い換えや短文化等により簡略化した話し方 (simplified speech) である。「言語ホスト性」は、媒介言語の習熟度の差によって生まれる言語行動の特徴であるという点では「フォリナー・トーク」と共通している。しかし、母語話者が複数人いる場合には、母語話者同士であえてその場にいる非母語話者の言語能力を超えた話し方をすることもある。すなわち、母語話者が複数人いる場合の「言語ホスト性」には必ずしも非母語話者の理解促進が意図されていない。本稿では、非母語話者とのやり取りのみならず、接触場面における母語話者同士に特有のやり取りも含む「言語ホスト性」を扱う。

上記を踏まえ、日本語母語話者の会話スタイルに特徴的とされてきた「共同発話」という言語現象を分析対象とし、同一談話内における日本語母語話者間のやり取り及び日本語母語話者・非母語話者間のやり取りが観察可能な三者間会話を用い、接触場面における日本語母語話者の「言語ホスト性」について考察する。

2. 先行研究

2.1. 接触場面における母語話者の言語管理

本節では、接触場面における母語話者の言語管理を扱った先行研究を概観し、本研究における母語話者の「言語ホスト性」という概念について説明する。

接触場面¹とは、「異なる言語、文化背景を持つ参加者間のインターアクションの場面」(ファン 2006, p. 120) のことであり、同じ言語を母語とする者同士がやり取りを行う母語場面とは区別される。接触場面における母語話者の言語管理に関する研究では「フォリナー・トーク」を扱ったものが多く、非母語話者に対する「何らかの修正の入った特殊な話し方」(志村 1989, p. 204) が明らかにされてきた。その修正方法として、形態レベル及び統語レベルの簡略化 (基礎的な語彙の使用、短文化)、音声の大きさ及び発話速度の調整、明示化、言い換え、選択疑問文の使用等 (Henzl 1973, Ferguson 1975, Hatch, Shapira and Gough 1978, Long 1981 等) が挙げられてきた。これらの修正は直接非母

¹ 接触場面の分類について、ファン (2006) は「相手言語接触場面」、「第三者言語接触場面」、「共通言語接触場面」という3種類を区別している。本研究で扱う「接触場面」とは「相手言語接触場面」を指す。

話者に向けた発話で行われており、非母語話者の理解促進や負担軽減を図った言語管理である。ところが、複数の母語話者がやり取りに参加する場合は、非母語話者が入らない母語話者同士のみのやり取りが行われることもあり、接触場面であってもすべての発話が必ずしも非母語話者に向けた「フォリナー・トーク」であるとは限らない。そしてここで問題となるのは、直接会話には参与しないが、その場の当事者として居合わせた非母語話者の存在が母語話者間のやり取りで意識されるかどうか、また、母語話者同士の言語行動は母語場面と接触場面で同じであるかどうかということである。直感的には母語話者間の発話であっても、母語話者が非母語話者の存在を意識すれば、母語場面とは異なる行動を取ると考えられる。よって本稿では、母語話者間のやり取りも含め、接触場面における非母語話者を意識した母語話者の言語行動の特徴を「言語ホスト性」と呼称する。

「言語ホスト」(linguistic host)とは、Fan (1994) が提示した用語であり、接触場面における母語話者と非母語話者の関係及び役割を表したものである。Fan (1994) によると、接触場面における母語話者と非母語話者は言語的な「優者」と「劣者」ではなく、言語的な「ホスト」と「ゲスト」という特殊な関係にあるという。そして、「言語ホスト」としての母語話者は接触言語におけるやり取りの規範を定める権限を持つ。本稿では、直接非母語話者に向けられた「フォリナー・トーク」に限定せず、接触場面において非母語話者の存在を意識した母語話者の言語行動を指すより広い概念として「言語ホスト性」という言葉を用いる。

2.2. 「共同発話」とは

本稿で分析対象とする「共同発話」とは、「2人以上の参加者によって作り上げられる名詞句や節、単文、複文等」(ザトラウスキー 2000, p. 44) のことであり、談話例 (1) に示したような言語現象である。²

(1) 共同発話

1 A この..この流れが

² 文字化記号一覧

↑	上昇イントネーションを示す。
、	トランスクリプトの見やすさのために、読点として慣例通りに付ける。
..	つかえにおいて生じる短い間を示す。
“文字”	話者及び話者以外の者の発話や思考等の内容が引用された部分を示す。
《数字》	沈黙の秒数を示す。
=	ラッチングを示す。
::	直前の音が引き伸ばされていることを示す。
文字	複数の発話が重複した部分を示す。
[文字]	発話の音声上の特徴、発話を伴う非言語行動等の文脈情報を示す。
{文字}	笑いながら発話された部分を示す。

- 「相づち先取り」及び「返答・発展先取り」では、予測された内容が言語化されないため、先行部と後続部は一つの文をなさない。この点では、「相づち先取り」及び「返答・発展先取り」は「共同発話」とは性質が異なるため、本研究では分析対象としない。

他には、「共同発話」を指すものとして、「共同構造構築」(藤井 2000)、「引き取り」(串田 2002)、「共同発話文」(宇佐美 2006)、「リレー発話」(藤井 2016) という用語も見られるが、本稿では上記の相違を踏まえ、「共同発話」という用語を用いる。

会話における共同発話の機能については、Hayashi (2003) は話し相手への共感や理解、共通認識の表明、植田 (2004) は診察場面における情報確認や情報補足、発話代行、発話促進、共感的フレーム形成、発話修正という機能を挙げている。

また、接触場面における共同発話は発話困難を抱える非母語話者への「助け舟」³ (森本 2002) として働くことが多く、非母語話者が明示的に母語話者の援助を求めることがあれば、母語話者が非母語話者の言い淀みや沈黙からトラブルを察知し、代わりに非母語話者の発話を完成させることもある。さらに、柳田 (2011) は、日本語母語話者の接触経験の多少に焦点を当て、非母語話者に対する言語行動を分析している。その中で、「共同発話」を「援助発話」として捉え、接触経験の多い母語話者は非母語話者からの援助要求が明確でない場合でも、非母語話者の発話困難を察知し積極的に援助を行うと指摘している。それに対して、接触経験が少ない母語話者は援助要求に応じるというよりも相手への理解や共感を示すと述べている。

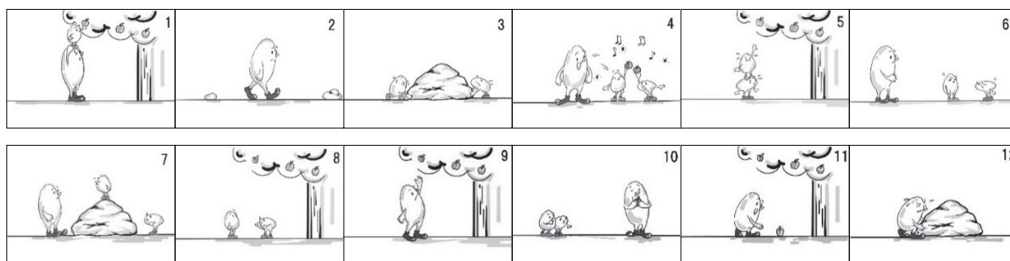
本節で取り上げた先行研究からは場面による機能の違いが窺えるが、接触場面を扱った研究は少なく、これまでの報告は断片的である。そこで、本研究では日本語母語話者と非母語話者が共同で課題達成に取り組む会話のデータを用い、共同発話における先行話者が母語話者である場合と非母語話者である場合との相違に着目した。

3. 分析データ

本分析データは母語場面及び接触場面における三者間課題達成談話である。課題内容は参加者 3 人で 12 枚の絵カード⁴ を並べ替えてストーリーを作ることである。母語場面のデータは 2013 年～2014 年⁵ に 7 会話、接触場面のデータは 2014 年～2018 年に 9 会話

³ 「助け舟」(串田 1999) とは、話し手の言葉探しに対して聞き手が言葉を補充することである。

⁴ 課題の絵カード



⁵ 母語場面の会話データは、ツォイ (2016) の調査で収集したものである。

を東京都内の大学で収集し、いずれも条件統制下で収録した。調査協力者は、20代前半の女性であり、日本語母語話者は39名、非母語話者は9名（うち中国語母語話者は3名、ロシア語母語話者は2名、ブルガリア語母語話者、フィンランド語母語話者、クメール語母語話者、ベトナム語母語話者は各1名）である。

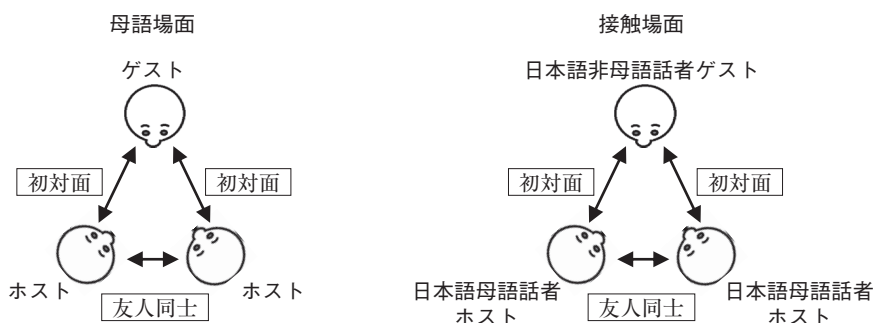


図1 会話グループの構成

前節で述べたように、接触場面では、母語話者間のやり取りであっても母語場面とは異なり、母語話者がその場に居合わせた非母語話者を意識した言語行動を取ることが考えられる。そこで、本研究では母語話者間のやり取りも含め、接触場面における「言語ホスト性」を包括的に捉えるために、同一談話内における母語話者間のやり取り並びに母語話者・非母語話者間のやり取りが観察可能な三者間会話を設定した。

各会話グループは友人同士の2名及び2人とは初対面の者の1名により構成されている。以降、友人同士の話者を「ホスト」、初対面の話者を「ゲスト」と呼ぶ。また、接触場面の会話グループでは、母語話者に明確なホスト意識を持たせるために、初対面の話者を非母語話者にした（図1）。

4. 分析方法

分析方法としては、量的分析及び質的分析を併用した。量的分析では、後続話者が先行発話を引き取る件数⁶を集計し、談話レベル及び発話レベルでの検討を行った。談話レベ

⁶ 本研究における分析対象は共同発話である。ただし、1つの共同発話中に話者が複数回交替することがあるため、量的分析の単位を、後続話者が先行発話を引き取る件数とする。例(a)は一つの共同発話とみなされるが、後続話者が先行発話を引き取る件数は下線部の3件である。分析では、表3の分析項目の定義に従いそれぞれのラベリングを行った。

(a) 43 25NF1 拾って食べて、で、誰かがみっ
44 25NF2 見 | てて :: |
45 25NF1 | この2人 | が =
46 25NF2 = 頑張っ.. た

ルでは、共同発話が出現する談話の性質、発話レベルでは、共同発話の構造及び後続部をなす発話の機能に焦点を当てた。

分析の流れとしては、まず、後続話者が先行発話を引き取る箇所について分析項目の特徴（表 3）が出現した件数を集計し、全体の傾向について量的な検討をした。次に、質的分析では、具体的な談話例を取り上げ、共同発話における相互行為及び量的分析により示唆された結果について考察した。

表 3 共同発話の分析項目

分析項目	下位分類	定義
① 談話の性質	ストーリー作成	共同発話が出現する談話は、会話参加者が課題のストーリー内容及び展開について話すものである。
	作業管理	共同発話が出現する談話は、会話参加者が課題の解決方法、絵カードの位置、絵カードの内容について話すものである。
② 共同発話の構造	間（ま）あり	共同発話の先行部と後続部との間に 0.5 秒以上の沈黙が生じる。
	連続	共同発話の先行部の後に 0.5 秒以下の間がある。あるいは全く間がなく先行部の直後に後続部が続く。
	重複	共同発話の先行部の途中から後続話者も話し始めることにより先行部と後続部が重複する。
③ 共同発話の後続部における発話の機能	拡張 ⁷	共同発話が重文をなしており、その先行部は並列節として後続部と等位関係にある。
	補完	共同発話の先行部と後続部を合わせて一つの節、あるいは複文における主節と従属節をなす。
	ユニゾン ⁸	後続話者が先行話者と同じタイミングで同じ言葉を発する。

⁷「拡張」と「補完」は、共同発話の先行部と後続部が等位関係にあるかどうかによって区別される。「拡張」の場合は、先行部（例（b）、82 行目）は並列節として完成しており、後続部（例（b）、84 行目）なしでも意味をなす。そして、先行部と後続部は等位関係にあるため、後続部に意味的、統語的な制約が少なく、後続部では自由な展開が可能である。一方、「補完」の場合は、先行部（例（c）、81 行目）は節として完成していない、あるいは、従属節（例（d）、423 行目）であるため、後続部の内容や構造が意味的、統語的な制約を受け、先行部によって限定される。

(b) 82 23NF2 1 人でも取れなくて ::

83 《1.91》

84 23NS

協力すると ::、取れるんですね

(c) 81 4NF2 で、りんご =

82 4NF1

= 取れない ::

(d) 423 2NF1 食べたから ↑

424 2NF2

あ、嫌な顔したっ

⁸「ユニゾン」とは、串田（1997）による概念であり、会話参加者が「同じ言葉を同時に発する」（p. 249）ことである。

5. 分析結果

まず、全体の傾向を見るために、母語場面及び接触場面に出現した共同発話の平均について t 検定を行ったが、有意な差は見られなかった ($t=1.97$, $df=14$, $n.s.$) (表 4)。しかし、共同発話の引き取り者に焦点を当てたところ (表 5、表 6)、Kruskal-Wallis 検定では接触場面のデータについて有意な群間差が認められ ($H=11.10$, $p<.01$)、ゲストがホストの発話を引き取る場合の共同発話とホスト同士の共同発話との間に有意差が得られた。

表 4 母語場面及び接触場面における共同発話の平均値

	平均値	最大値	最小値	t 検定
母語場面	6	13	1	$n.s.$
接触場面	10.78	16	2	

表 5 母語場面における共同発話の
引き取り者別の比較

	平均値	最大値	最小値	分散 分析
ホストがゲストの 発話を引き取る	1.00	4	0	$n.s.$
ゲストがホストの 発話を引き取る	2.29	6	0	
ホスト同士の 引き取り	2.71	8	0	

表 6 接触場面における共同発話の
引き取り者別の比較

	平均値	最大値	最小値	Kruskal- Wallis 検定
ホストがゲストの 発話を引き取る	3.67	11	0	$p<.01$
ゲストがホストの 発話を引き取る	0.89	3	0	
ホスト同士の 引き取り	6.22	14	1	

母語場面・接触場面それぞれの平均値を見ると、母語場面では初対面のゲストがホストの発話を引き取る場合 ($M=2.29$) とホスト同士が発話を引き取る場合 ($M=2.71$) の差が希薄であるのに対して、接触場面では、非母語話者のゲストによる共同発話の引き取り ($M=0.89$) とホスト同士の引き取り ($M=6.22$) との差は非常に大きいことが分かる。共同発話は引き取り者の予測に基づくものであり (Lerner 1991、田中 1998)、後続部の構築及び適切なタイミングに媒介言語の高い習熟度を要する。このように母語話者が共同発話の引き取り者になることが多いという結果から、接触場面における共同発話の引き取りは「言語ホスト性」の特徴として捉えられる。

5.1. 共同発話が出現した談話の性質

本分析では、談話の性質によって共同発話を「ストーリー作成」の部分に出現したもの及び「作業管理」の部分に出現したものに分類し、その平均値を比較したところ (表 7、表 8)、 t 検定では、接触場面について「ストーリー作成」と「作業管理」との間に有意差が認められた ($t=5.37$, $df=8.8$, $p<.001$)。

表 7 母語場面：談話の性質による
共同発話の比較

	平均値	最大値	最小値	t 検定
ストーリー作成	5.43	11	0	<i>n.s.</i>
作業管理	0.57	2	0	

表 8 接触場面：談話の性質による
共同発話の比較

	平均値	最大値	最小値	t 検定
ストーリー作成	9.67	16	0	<i>p<.001</i>
作業管理	1.11	3	0	

さらに、引き取り者別の比較を行った結果（表 9、表 10）、Kruskal-Wallis 検定では接触場面における「ストーリー作成」の共同発話についてゲストがホストの発話を引き取る場合とホスト同士の場合との間に有意差が認められた（ $H=7.38$, $p<.05$ ）。

表 9 母語場面：「ストーリー作成」
における引き取り者別の比較

	平均値	最大値	最小値	分散 分析
ホストがゲストの 発話を引き取る	0.86	3	0	<i>n.s.</i>
ゲストがホストの 発話を引き取る	2.57	7	0	
ホスト同士の 引き取り	2.00	8	0	

表 10 接触場面：「ストーリー作成」
における引き取り者別の比較

	平均値	最大値	最小値	Kruskal- Wallis 検定
ホストがゲストの 発話を引き取る	3.22	9	0	<i>p<.05</i>
ゲストがホストの 発話を引き取る	0.89	3	0	
ホスト同士の 引き取り	5.56	14	0	

この結果からは、接触場面における共同発話は課題達成談話の主要部分となる「ストーリー作成」に集中しており、その多くがホストに引き取られるということが分かる。

実際の談話では、母語場面と接触場面に共通するものとして談話例（2）のような展開が観察された。談話例（2）は、非母語話者ゲスト 4NNS がホストの 4NF1、4NF2 と絵カードを並べながら、ストーリーの内容を語る場面である。以降、共同発話における先行部と後続部の連結部分を下線で示す。

（2）接触場面 4：ストーリー作成における共同発話

- 240 4NF2 あ ::、お腹空いてて ::、落ちてた ::、食べた :: [カード 11、10、8 を指す]
 241 4NF1 あっ、これは、なんっ
 242 4NF2 落ちてた、食べ.. | た ::、“いい | な ::、じゃ | 私達も | | 食べよう” |
 243 4NF1 | “いいな :: | | | 食べたい | な”
 244 4NNS | “いいな” |
 245 4NNS でも | できない、だ | から、そうしたら、えっとね、これは [カード 3 を取る]
 246 4NF2 | 取れな :: い |
 247 4NNS じゃ、何
 248 4NF2 “大丈夫 ↑”

談話例 (2) では、ホスト同士の 4NF1 と 4NF2 による共同発話 (242~243 行目) 及びホスト 4NF2 が非母語話者ゲスト 4NNS の発話を引き取ろうとする場合の共同発話 (245~246 行目) が見られる。まず、240 行目では、ホスト 4NF2 は絵カードを指しながらストーリーを語り始めるが、243 行目ではカードの内容からストーリー展開を予測した 4NF1 も語りに加わり、りんごが「落ちてた、食べ.. た ::、“いいな ::、私達も食べたいな”」という形で 4NF2 と共同で一つの発話を作り上げる。さらに、流れをつかんだ非母語話者ゲスト 4NNS は発話を引き取り、ストーリーの続きを話すが、ホスト 4NF2 も非母語話者ゲスト 4NNS の発話に合わせて「でも、取れな :: い」と共同で発話を構築する。

Lerner (1991) が述べているように、共同発話の特徴は後続部の内容及び共同発話全体の構造が予測可能なことである。この点では、本会話データにおける絵カードの役割が大きい。談話例 (2) から分かるように、「ストーリー作成」の部分においては、絵カードが視覚的な情報源となるため、現行の話し手の発話展開が予測しやすい。さらに、「ストーリーの語り」という比較的平坦な言語活動は陳述を中心としており、文としての構造が明確な発話が多いということも発話展開の予測しやすさに繋がっている。

5.2. 共同発話の構造

本節では、共同発話の構造に焦点を当てた分析の結果を示す。まず、母語場面・接触場面それぞれにおいて「間あり」の共同発話、「連続」した共同発話、「重複」した共同発話の平均値を比較したところ、母語場面のデータには有意差がなかった (表 11)。一方、接触場面のデータについては有意な群間差が認められ ($F(2, 24) = 5.51, p < .05$)、多重比較の結果、「間あり」の共同発話は「連続」した発話及び「重複」した共同発話に比べ有意に少ないことが分かった (表 12)。

表 11 母語場面：共同発話の
構造による比較

	平均値	最大値	最小値	Kruskal-Wallis 検定
間あり	0.71	3	0	n.s.
連続	2.57	5	0	
重複	5.57	15	0	

表 12 接触場面：共同発話の
構造による比較

	平均値	最大値	最小値	分散分析
間あり	2.67	8	0	$p < .05$
連続	8.78	16	0	
重複	8.67	18	3	

次に、共同発話の引き取り者別の比較を行ったところ、「連続」した共同発話については母語場面・接触場面ともに有意な群間差が認められ (母語場面: $F(2, 18) = 4.23, p < .05$; 接触場面: $H = 8.45, p < .05$)、母語場面については、ホストがゲストの発話を引き取る場合よりホスト同士が発話を引き取る場合のほうが多いことが示された (表 13)。一方、接触場面では、有意差が認められたのはゲストがホストの発話を引き取る場合とホスト同士が発話を引き取る場合との差である (表 14)。すなわち、母語場面におけるホスト

の引き取りについては共同発話の相手による相違、つまり、ホストはゲストに対して「連続」した共同発話を構築することが少ないということが示唆されるが、接触場面においてはこの相違は見られない。また、非母語話者ゲストが行う引き取りについては、ホスト同士に比べ「連続」した発話が少なく、適切なタイミングでホストの発話を引き取ることの困難さが窺える。

表 13 母語場面：「連続」の共同発話
における引き取り者別の比較

	平均値	最大値	最小値	分散 分析
ホストがゲストの 発話を引き取る	0.14	1	0	$p < .05$
ゲストがホストの 発話を引き取る	0.29	1	0	
ホスト同士の 引き取り	1.00	2	0	

表 14 接触場面：「連続」の共同発話
における引き取り者別の比較

	平均値	最大値	最小値	Kruskal- Wallis 検定
ホストがゲストの 発話を引き取る	1.56	4	0	$p < .05$
ゲストがホストの 発話を引き取る	0.33	1	0	
ホスト同士の 引き取り	2.67	8	0	

さらに、ゲストに対する共同発話について場面間の比較を行ったところ、「連続」の発話に有意差が認められ ($t = 2.70$, $df = 9.26$, $p < .05$) (表 15)、接触場面のほうが、ホストが「連続」した発話によってゲストの発話を引き取ることが多かった。

表 15 ホストの発話がゲストの発話に「連続」する場合の共同発話の比較

	平均値	最大値	最小値	t 検定
母語場面	0.14	2	0	$p < .05$
接触場面	1.56	4	3	

上記の結果をまとめると、接触場面では、「連続」及び「重複」の共同発話が多く、「連続」した発話の大部分はホストの引き取りによるものであった。また、ゲストに対する「連続」共同発話は母語場面より多かった。

以下の談話例 (3) は、ホストが非母語話者ゲストの発話を引き取り、「連続」した共同発話を作り上げる場合を示したものである。非母語話者ゲスト 7NNS とホスト 7NF2 がもう 1 人のホスト 7NF1 の提案に対して反対意見を述べている。

(3) 接触場面 7：非母語話者ゲストの発話の直後にホストの発話が連続する

561 7NF1 そうしたら、出会いました ::

562 7NF2 うん

563 《0.93》

564 7NF2 ん ↑、| でも、回想シーンだっ | たら、おかしい

565 7NNS | えっ、でも、ここ :: [カード 6] |

566 7NNS ここ [カード6] とここ [カード7] は ::

567 7NF2

合わない

まず、561 行目ではホスト 7NF1 は「そうしたら、出会いました ::」とストーリーの流れについて提案するが、それに対してホスト 7NF2 は「でも、回想シーンだったら、おかしい」(564 行目) と反対意見を述べる。非母語話者ゲスト 7NNS もそのストーリー展開に対して問題点を指摘しようとするが、「ここは ::」と音を引き伸ばし、発話の完成を躊躇する。そこで、ホスト 7NF2 は発話の後半を引き取り、非母語話者ゲスト 7NNS に同意を示すと同時に「合わない」とホスト 7NF1 の提案を却下する。このように談話例 (3) では、ゲストとしての 7NNS にとって述べにくい反対意見を、7NF2 が引き取り、「連続」した共同発話によって会話が途切れないようこの場の言語ホストとして展開を管理しているのである。

一方、先行部と後続部が重複する共同発話については、ホスト間の引き取り及びホスト・ゲスト間の引き取りに共通して次のような 2 パターンが観察された。一つ目は、後続話者が発話展開を予測し、発話を引き取ろうとするにも関わらず、先行話者が話し続ける場合(談話例 (4)、114~117 行目)である。二つ目は、後続話者が新情報を加えずに、先行話者と同じタイミングで同じ言葉を発するといった「ユニゾン」(串田 1997) の場合である(談話例 (4)、118~119 行目)。

(4) 接触場面 6: ホスト間の共同発話における先行部と後続部の「重複」

113 6NF2 あ、|じゃ、それで::、こっ、“取りに |行こうよ”| となつて:: |

114 6NF1 |こうやったら::、こうやって:: | |“取りに行こう”つてなっ |

115 6NF2 |て:: |、|無理で |

116 6NNS |う::ん |

117 6NF1 |取って:: |、無理で::

118 6NF2 頼ん |で:: |

119 6NF1 |で:: |、なんか、“頼むやついないかな”

114~117 行目の部分では、ホスト同士の 6NF1 及び 6NF2 はストーリーの流れについて交互に一部ずつ発話を継ぎ足しながら、「“取りに行こう”つてなっ」(114 行目)「て::、無理で」(115 行目)「取って::」(117 行目)と一つの発話を作り上げている。2 人がかなり速いペースでやり取りを進めているため、115 行目と 117 行目との連結部分では、ホスト 6NF2 による「無理で」とホスト 6NF1 による「取って::」が重複してしまうが、両者の理解には支障が生じておらず、作業がスムーズに進む。さらに、118~119 行目では、ホストの 2 人はストーリー展開や互いの発話ペースについての認識が一致し、119 行目でホスト 6NF1 は 6NF2 にタイミングを合わせて同時に「で::」と発話する。

談話例 (4) で見た 114～117 行目の共同発話と 118～119 行目の発話における重複は性質が異なる。114～117 行目では、話者はそれぞれストーリー作成において新たな情報を追加しながら、発話構築に実質的な貢献をしている。それに対して、118～119 行目の共同発話では、後続話者は発話構築への実質的な貢献をするというより、先行話者と同じタイミングで同じ言葉を発することにより強い共感や連帯感を示している。

このように、上記で見た談話例 (3)～(4) からは、共同発話の後続部をなす発話の機能による相違も示唆された。そこで、5.3 では後続部の発話の機能に焦点を当て、言語ホストの言語行動を分析する。

5.3. 共同発話の後続部における発話の機能

本節では、共同発話の後続部における発話の機能に焦点を当てた分析の結果について述べる。母語場面・接触場面それぞれにおいて「拡張」、「補完」、「ユニゾン」の平均値を比較したところ、母語場面のデータには有意差がなかった (表 16)。一方、接触場面のデータについては有意な群間差があった ($F(2, 24) = 4.38, p < .05$)。多重比較の結果、「補完」と「ユニゾン」との間に有意差が認められ、接触場面では「ユニゾン」に比べ「補完」のほうが多いということが分かった (表 17)。

表 16 母語場面：共同発話の構造による比較

	平均値	最大値	最小値	Kruskal-Wallis 検定
拡張	2.00	5	0	n.s.
補完	2.86	7	0	
ユニゾン	1.14	4	0	

表 17 接触場面：共同発話の構造による比較

	平均値	最大値	最小値	分散分析
拡張	4.33	10	0	$p < .05$
補完	5.00	9	2	
ユニゾン	1.44	8	0	

また、共同発話の引き取り者別の比較を行ったところ、Kruskal-Wallis 検定では接触場面における「拡張」($H = 6.11, p < .05$) 及び「補完」($H = 8.16, p < .05$) について、ゲストがホストの発話を引き取る場合とホスト同士の引き取りの場合との間に有意差が認められた (表 18、表 19)。つまり、「拡張」、「補完」のいずれもゲストがホストの発話を引き取る場合よりホスト同士の引き取りの場合のほうが多かった。

表 18 接触場面：「拡張」の共同発話
における引き取り者別の比較

	平均値	最大値	最小値	Kruskal- Wallis 検定
ホストがゲストの 発話を引き取る	1.11	2	0	$p < .05$
ゲストがホストの 発話を引き取る	0.33	2	0	
ホスト同士の 引き取り	2.89	9	0	

表 19 接触場面：「補完」の共同発話
における引き取り者別の比較

	平均値	最大値	最小値	Kruskal- Wallis 検定
ホストがゲストの 発話を引き取る	2.33	7	0	$p < .05$
ゲストがホストの 発話を引き取る	0.44	1	0	
ホスト同士の 引き取り	2.22	5	0	

さらに、場面間の比較では、ゲストに対する共同発話を見たところ、「拡張」の共同発話についてのみ有意差が認められ ($t = 2.43$, $df = 14$, $p < .05$) (表 20)、接触場面のほうが、ホストがゲストの発話を「拡張」することが有意に多かった。

表 20 ホストがゲストの発話を「拡張」する場合の比較

	平均値	最大値	最小値	t 検定
母語場面	0.29	1	0	$p < .05$
接触場面	1.11	2	0	

この結果をまとめると、共同発話の後続部における発話の機能については、接触場面では「拡張」、「補完」とともにホストによるものが多く、ホストがゲストの発話を「拡張」することが母語場面より多いと言える。

談話例 (5) は、ホストの 7NF1 と非母語話者ゲストの 7NNS がストーリーの流れを考える場面である。

(5) 接触場面 7：ホストによる非母語話者ゲストの発話の「拡張」

- 235 7NNS 最初はこの人は 1 人で悩んで | て :: |、 | この 2 人も悩んでる :: | んだ
- 236 7NF2 | うん |
- 237 7NF1 | こっち側にいて :: |
- 238 7NNS けど、なんか、結局出会って :: =
- 239 7NF1 = で、“協力しよう ::” [笑う]

談話例 (5) では、非母語話者ゲスト 7NNS の発話 (235 行目、238 行目) が主軸となっており、ホスト 7NF1 は節の区切り目に「こっち側にいて ::」(237 行目)、「で、“協力しよう ::”」(239 行目) とストーリーの続きを追加している。いずれの場合も 7NNS の発話

には節の終了部を示す音の引き伸ばしが見られ、ホストの 7NF1 はラッチング⁹ 及び重複を伴う発話の引き取りによって会話に割り込んでいる。この共同発話から 7NF1 が追加した部分を取り除いても、7NNS の発話の構造が崩れず、ストーリーの流れが変わらない。つまり、7NF1 が発話の共同構築に参与せずとも、7NNS の発話は成立するが、ここでは、7NF1 はストーリー展開を大きく左右しないものの、ゲストの発話を拡張させることにより言語ホストとしてストーリー作りに貢献し、作業進行を管理しようとしていると言える。

一方、ホスト間のやり取りになると、談話例 (6) のように、共同発話の構築者は積み木方式で交互に等位関係の並列節を継ぎ足すことにより共同発話を「拡張」することが見られる。

(6) 接触場面 1: ホスト間の「拡張」

- 241 1NF2 それをこのちっちゃいのが見て
 242 1NF1 “いいな” | って思って :: |
 243 1NF2 | “いいな” と | 思って ::、りんごを木
 244 1NF2 から取ろうとして ::
 245 1NF1 取れなくて
 246 1NF2 取れなくて、で、手伝ってもらって、取れて
 247 1NNS | うん | [頷く]
 248 1NF1 | “やった” |
 249 1NF2 “協力、いいこと”みたいな [笑う] [1NNS を見る]

談話例 (6) では、1NF1 は 1NF2 の発話における節の終了部分に「“いいな”って思っ
て ::」(242 行目)、「取れなくて」(245 行目)、「“やった”」(248 行目) と続きを追加し、3
箇所ですら先行発話を拡張している。そして 1NF2 は繰り返しによって 1NF1 の発話を積極
的に取り入れつつ、1NF1 と交代でストーリー構築を進める。このようなリレー及び繰り
返しは先行研究においても指摘されており、藤井 (2016) は、アメリカ人英語話者との比
較から、リレー発話や繰り返しは日本語母語話者の会話に圧倒的に多いと報告している。
談話例 (6) ではさらに接触場面からの事例が提示され、共同発話の「拡張」におけるリ
レー構築や先行発話の繰り返しから言語ホストとしての母語話者間の連携や仲間意識が示
唆された。

「補完」に関しては、非母語話者ゲストとの共同発話では 2 つのパターンが観察された。
次の談話例 (7) では、ホスト 8NF2 が非母語話者ゲスト 8NNS の発話の続きを予測し、
節の途中からラッチング (549~550 行目) や重複 (551~552 行目) をしながら、発話を

⁹ 「ラッチング」とは、先行発話と後続発話との間にまったく間がないことを指す。

引き取って補完している。

(7) 接触場面 8：非母語話者ゲストに対する「補完」

- 549 8NNS そうして自分 =
 550 8NF2 = でやって ::
 551 8NNS じゃ、自分でやって ::、これも | 自分でやって |
 552 8NF1 | やって、無理 :: |
 553 8NF2 無 | 理 :: |
 554 8NF1 | 助 | けてもらう ::

549～550 行目の共同発話では、非母語話者ゲスト 8NNS が「そうして自分」とストーリーを語っているところに、ホスト 8NF2 はラッチングにより割り込み、8NNS が話し終わる前に「でやって ::」と発話を引き取っている。そして、非母語話者ゲスト 8NNS はホスト 8NF2 の発話を踏まえ、「補完」された部分を取り入れた上で、語りを再開するが、今度はもう一方のホストの 8NF1 が非母語話者ゲスト 8NNS の「これも」(551 行目)の後に「やって、無理 ::」を重ね、「助けてもらう ::」(554 行目)と共同で発話を完成させる。

もう一つのパターンとして、説明に詰まった非母語話者ゲストの代わりにホストが発話を完成させることにより、ゲストに理解を示しながら「助け舟」を出す場合がある。

(8) 接触場面 1：非母語話者ゲストに対する「助け舟」としての「補完」

- 130 1NNS あっ、これは、たぶん、この前
 131 1NF2 前か
 132 1NNS お ::、ん、あの“りんごを食べたい”、でも [りんごが取れないことを身振りで表現]
 133 《1.03》
 134 1NF2 取 | れない |
 135 1NF1 | 取れないや :: |
 136 1NNS | 取っ取れない | あっ、偶然 “あっ、
 137 1NNS 落ちた ::”、あった
 138 1NF2 あ ::、確かに、それも行ける

談話例 (8) の 130、132 行目では、非母語話者ゲスト 1NNS はストーリー展開について話しているが、「でも」(132 行目)の後に説明に詰まり、身振りで言いたいことを表現する。これを受け、ホストの 1NF1 と 1NF2 は 1.03 秒後にほぼ同時に「取れない」(134、135 行目)と非母語話者ゲスト 1NNS の発話を完成させる。そして、ホストの「補完」によって、非母語話者ゲスト 1NNS は途中で止まっていた発話を続け、提案しようとしていたエピソードを最後まで話すことができた。こうして、母語話者は共同発話によって非母語話者の発話内容に理解を示し、非母語話者の課題解決への参加を補助している。

6. 共同発話における日本語母語話者の「言語ホスト性」

本節では、量的分析及び談話例の分析から示唆された結果を総合的に考察し、課題達成談話の共同発話に見られる日本語母語話者の「言語ホスト性」について検討する。

まず、全体の傾向としては、非母語話者ゲストがホストの発話を引き取るのは非常に少ないことが明らかだった。共同発話は予測に基づくものであるため、発話の引き取りには媒介言語の高い習熟度が求められる。この点では、十分な日本語能力を備えていない非母語話者に比べ、母語話者は優位な立場にあり、その場の言語ホストとしてゲストの発話を引き取り共同で発話を完成させることが多い。

次に、談話の性質、発話の構造、共同発話の後続部の機能に焦点を当てた分析からは以下のことが示唆される。

前節で述べたように、本データにおける会話の目的は、参加者3人でストーリーを作り上げるといって課題達成であるため、ストーリー内容の語りが主な言語活動となっている。語りは陳述文を中心としており、基本的には平坦で一方向的であるため、会話参加者が共同の「語り手」として現行の話し手に寄り添う形で発話を共有しやすい仕組みになっている。さらに、「ストーリー作成」においては絵カードという視覚的情報源もあり、発話展開の予測性が高いため、「ストーリー作成」に関する談話は共同発話が出現しやすいと考えられる。この傾向は接触場面のデータにおいて顕著であることを非母語話者の存在による特性と捉えられる。

共同発話の構造について先行部と後続部の連結部分を見たところ、接触場面における共同発話には先行部の後に沈黙が生じるものが少なく、「重複」及び「連続」した発話が多かった。さらに、ゲストに対する共同発話に関しては、母語場面に比べ接触場面のほうが「連続」した発話による引き取りが多いという結果も得られた。談話例の分析から示唆されたように、母語話者は会話が途切れないよう言語ホストとして非母語話者の発話を「連続」した発話により引き取り、会話展開を管理していた。一方、非母語話者は日本語の熟練者である言語ホストに発話の続きを委ね、相手と同時に話さなかった。こうして「連続」の共同発話からは接触場面における言語ホストと言語ゲストの立場の違いが明確になった。

最後に、共同発話における後続部の機能については、接触場面では「ユニゾン」による共同発話が少なく、ホストによる「拡張」及び「補完」が多かった。「拡張」及び「補完」では、言語ホストはラッチングや重複を伴う引き取りによりゲストの発話に割り込み、作業進行を管理しようとする姿勢が見られた。さらに、非母語話者の発話産出が困難な場面では、言語ホストがゲストの発話を「補完」することにより「助け舟」を出すことも観察された。一方、接触場面におけるホスト間の共同発話では、「拡張」により交互に積み木方式で次々とストーリーのシーンを継ぎ足し、互いの発話を取り入れながら、速いペース

で作業を進めるというパターンが特徴的だった。

このように本分析の結果を総合的に捉えると、接触場面での課題解決における日本語母語話者の「言語ホスト性」は、共通認識に基づいたホスト間の連携作りやストーリー作成の促進及び、非母語話者に対する理解表明や参加補助としての共同発話に現れると言える。

7. おわりに

本稿では、三者間会話データを扱うことにより、接触場面における日本語母語話者・非母語話者間のやり取りのみならず、日本語母語話者間のやり取りも分析し、接触場面における母語話者の「言語ホスト性」の把握を試みた。

共同発話に見られる「言語ホスト性」については、母語話者は発話の続きを引き取ることにより説明に詰まった非母語話者を言語ホストとして補助するというプラス面が示された。一方で、非母語話者が自身の発話を文として完成させる機会を奪われることや、発話の完成を母語話者に委ねてしまうことなど、日本語教育の観点からはマイナスと捉えられる側面も観察された。これにより接触場面の会話における母語話者と非母語話者の役割の違いが示唆され、母語話者の言語行動をモデルとする外国語教育においては、母語話者の「言語ホスト性」を視野に入れた会話指導を検討する必要性が浮き彫りとなった。

本稿の会話データは少量のものであり、女性のみに限定されている。本研究で得られた結果を一般化するためには、男性データを補充し、非母語話者の母語や日本語能力等の特性を均一にした上、データ量を増やす必要がある。また、今後の展望としては、媒介言語の習熟度による非母語話者の共同発話構築への取り組み方の違い及びそれに対する母語話者の対応、接触場面における会話参加者の役割についても明らかにしていきたい。

参考文献

- Fan, S. K. 1994. "Contact Situations and Language Management." *Multilingua* 13(3), 237-252.
- ファン サウクエン. 2006. 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」、国立国語研究所 (編) 『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』、120-141、東京：アルク。
- Ferguson, C. A. 1975. "Toward a Characterization of English Foreigner Talk." *Anthropological Linguistics* 17(1), 1-14.
- 藤井聖子. 2000. 「在日系ブラジル人と日本人との接触場面の一分析—コミュニケーション・ストラテジー再考—」、国立国語研究所 (著) 『日本語とポルトガル語 (2) : ブラジル人と日本人との接触場面』、151-192、東京：くろしお出版。
- 藤井洋子. 2016. 「日本人のコミュニケーションにおける自己観と「場」—課題達成談話と人称詞転用の分析より—」、藤井洋子・高梨博子 (編) 『シリーズ文化と言語使用 1 コミュニ

- ケーションのダイナミズム 自然発話データから』、1-37、東京：ひつじ書房。
- Hatch, E., R. Shapira and J. Gough. 1978. “‘Foreigner-Talk’ Discourse.” *International Journal of Applied Linguistics* 39(40), 39-60.
- Hayashi, M. 2003. *Joint Utterance Construction in Japanese Conversation*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Henzl, V. M. 1973. “Linguistic Register of Foreign Language Instruction.” *Language Learning* 23(2), 207-222.
- 黒崎良昭. 1995. 「日本語のコミュニケーション——「共話」について——」、『園田学園女子大学論文集』30(1)、45-60.
- 串田秀也. 1997. 「ユニゾンにおける伝達と交感：会話における「著作権」の記述をめざして」、谷泰（編）『コミュニケーションの自然誌』、249-294、東京：新曜社。
- 串田秀也. 1999. 「助け舟とお節介：会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」、好井裕明・山田富秋・西阪仰（編）『会話分析への招待』、124-147、京都：世界思想社。
- 串田秀也. 2002. 「統語的単位の開放性と参与の組織化（1）：引き取りのシークエンス環境」、『大阪教育大学紀要 第II部門：社会科学・生活科学』50(2)、37-64.
- Lerner, G. H. 1991. “On the Syntax of Sentences-in-Progress.” *Language in Society* 20, 441-458.
- Long, M. H. 1981. “Questions in Foreigner Talk Discourse.” *Language Learning* 31(1), 135-157.
- 水谷信子. 1988. 「あいづち論」、『日本語学』7(13)、4-11、東京：明治書院。
- 森本郁代. 2002. 「発話権の尊重と会話の進行——日本語母語話者と非母語話者の会話に見られる「引き取り」をめぐる——」、『相互行為の民族誌的記述：社会的文脈・認知過程・規則』平成11年度-平成13年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書、59-78.
- 志村明彦. 1989. 「日本語の Foreigner Talk と日本語教育」、『日本語教育』68、204-215.
- 田中妙子. 1998. 「会話における〈先取り〉について」、『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』10、17-40.
- ツォイ エカテリーナ. 2016. 「課題解決に向けた三者間共同作業における言語行動——日本語とロシア語の対照研究——」博士学位論文、東京外国語大学。
- 植田栄子. 2004. 「医師と患者との診察場面会話における共同発話の機能」、『言語情報科学』2、15-28.
- 宇佐美まゆみ. 2006. 「話し手と聞き手の相互作用としての「共同発話文」の日英比較——「共話」、「Co-construction」現象の再検討——」、『高見澤孟先生古希記念論文集』、103-130.
- 柳田直美. 2011. 「日本語教育経験のない母語話者の情報とり方略に非母語話者との接触経験が及ぼす影響」、『日本語／日本語教育研究』2、51-66.
- ザトラウスキー ポリー. 2000. 「共同発話における参加者の立場と言語・非言語行動の関連について」、『日本語科学』7、44-69.